

令和6年度第7回一関市総合計画審議会 会議録

- 1 会議名 令和6年度第7回一関市総合計画審議会
- 2 開催日時 令和6年12月17日（火） 午後2時から午後4時まで
- 3 開催場所 一関保健センター 多目的ホール
- 4 出席者
 - (1) 委員 阿部利彦委員、伊藤拓也委員、岩渕一司委員、宇津野泉委員、大内早智子委員、加藤沙央里委員、小岩邦弘委員、西條恵美子委員、齊藤裕美委員、佐々木承子委員、佐藤弘子委員、東海林訓委員、菅原美津代委員、菅原秀文委員、千田久美子委員、千葉真美子委員、徳谷喜久子委員、藤本千二委員、星義弘委員、吉田捺委員
 - ※欠席者 泉賢司委員、及川恵理子委員、小野寺忍委員、小山亜希子委員、千田好記委員、船山賢治委員、吉田正弘委員
 - (2) 事務局 今野薫市長公室長、飯村昌弘市長公室次長兼政策企画課長、小山隆之政策企画課長補佐兼政策推進係長、佐々木さやか政策企画課主任主査、渡辺苑子政策企画課主任主事、谷藤義拓政策企画課主任主事
 - (3) 一関市総合計画策定支援業務受託者 株式会社邑計画事務所 及川一輝取締役

5 内 容

(1) 議題

ア 総合計画基本構想答申案について

イ 総合計画前期基本計画体系案について

(2) 答申

一関市総合計画基本構想について（答申）

6 公開、非公開の別 公開

7 傍聴者の数 3人（うち報道機関 3社）

8 小岩会長挨拶

本日、市長へ基本構想の答申を行うこととなるが、長い間、皆様にご協議いただいたことについて感謝申し上げます。

前半の議題の中で最終的な答申内容をまとめ、皆様から了承を得た上で市長への答申を行いたいと考えているため、本日は答申案についての議論を集中的に行う。

皆様から忌憚のないご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いしたい。

9 審議内容

(1) 総合計画基本構想答申案について

事務局から資料№.1-1、1-2、1-3に基づき説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 「第4章将来像を実現するためのまちづくりの考え方と役割」の「協働のまちづくり」の中に、行政の役割として「協働のまちづくりの考え方を重んじて」という記載があるが、さらに踏み込んだ表現として「協働のまちづくりの考え方に基づいて」としてはどうか。

事務局 「協働のまちづくりの考え方を重んじて、継続的な話し合いによる合意形成と、」の部分は、「継続的な話し合いによる合意形成」が「協働のまちづくりの考え方」であり、この2つを「基づいて」で結ぶと同じことの繰り返しとなるが、「基づいて」とすると「重んじて」よりも強い意味合いとなる。

委員 同じことの繰り返しとなっても、文章の流れが読む人に伝わればそれで良い。

委員 「重んじて」は「尊重して」という意味合いだが、「基づいて」となると「協働のまちづくりの考え方」がぶれない考え方であるという表現になる。同じ考え方の基で一緒に取り組んでいこうという趣旨だと思うので「基づいて」のほうが良いと思う。

委員 「基づいて」のほうが分かりやすい。

委員 企業や協働体など、それぞれの主体で目指すものがあり、その考え方を重要視し、話し合いによってまちづくりを進めていくということだと思うので、「基づいて」のほうが文章の流れとしても捉え方としても良いのではないか。

事務局 「協働のまちづくりの考え方に基づいた継続的な話し合いによる合意形成と、」ではいかがか。

委員 「基づいて」だと次の文章に直接的につながっていくように感じるが、「基づいた」だとそこで一旦切れてしまう印象がある。

会長 「基づいて」に修正することとしてよろしいか。

(はいの声)

委員 序章の「今を生きる私たち、そしてこれから産まれてくる子どもたちが、幸せを実感しながら暮らすことができるよう、私たちは手を携えて、誰もが暮らしやすさを感じられるまちづくりに取り組みます」の部分について、「暮らすことができるよう」と「誰もが暮らしやすさを感じられる」が同じようなことを言っているように思う。「幸せを実感しながら暮らすことができるよう、私たちは手を携えてまちづくりに取り組みます」のほうが分かりやすいのではないか。

委員 あえて略さないほうが明確に伝わるという考え方もある。中学生が読めるく

らの文章が良いと思うので、省略しすぎるのは良くない。

委員 省略しないほうが具体的な印象になると感じた。

委員 「暮らす」という言葉が2回出てくるのは、くどいように感じる。省略するのではなく、別の言葉に変えられると良い。

委員 「幸せを実感できるよう、私たちは手を携えて、誰もが暮らしやすいまちづくりに取り組みます」としてはどうか。

委員 「幸せを実感しながら暮らすことができるよう」の部分は、幸せをピンポイントで実感するのではなく、幸せを実感しながら人生を過ごしていくという継続性がある表現だと思うので、残したほうが良い。

事務局 委員がおっしゃるとおり、「幸せを実感しながら暮らすことができるよう」の部分は、毎日の暮らしの中で幸せを実感することができ、幸せの期間に継続性があるイメージである。「誰もが暮らしやすさを感じられるまちづくり」の部分は、これまでの審議会の中で、暮らしやすくてもそれを感じなければ意味がないというご意見があったところから、このような表現とした。

委員 「幸せを実感しながら人生を楽しんでいけるよう」と言い換えてはどうか。

委員 言葉を並び替えて「今を生きる私たち、そしてこれから産まれてくるこどもたちが、幸せを実感しながら、誰もが暮らしやすさを感じられるまちづくりに私たちは手を携えて取り組みます」ではどうか。

事務局 「今を生きる私たち、そしてこれから産まれてくるこどもたち」と後段の「私たち」で主語が2つとなり、まちづくりに取り組むのがどちらか分かりにくい文章となってしまう。

委員 後段の「私たち」は削除してよいのではないか。

事務局 後段の「私たち」を削除すると、「これから産まれてくるこどもたち」もまちづくりに取り組むという意味となるが良いか。

委員 良いと思う。

委員 これから産まれてくるこどもたちが幸せを実感しながら暮らすことができるように、私たちが取り組むものと考えていた。

委員 こどもであっても市民であることには変わらないので、これから産まれてくるこどもたちと私たちが手を携えるという意味になれば良いと思う。

委員 実際にまちづくりに取り組むのは「今を生きる私たち」なのではないか。

事務局 当初案は、これから産まれてくるこどもたちも幸せが感じられるように、今を生きる私達が頑張って取り組んでいくという意味としていた。

委員 意味付けはこの場で決めれば良い。

会 長 意味付けをこの場で決めるのは良いが、誰が読んでも分かりやすい内容であることが大切である。

委 員 「今を生きる私たち、そしてこれから産まれてくるこどもたちが、幸せを実感しながら暮らすことができるよう、私たちは手を携えて、誰もが暮らしやすさを感じられるまちづくりに取り組みます」の文章には「幸せを実感しながら」「暮らしやすさを感じられる」と似たような言葉があるので整理してはどうか。

事務局 思いや意味を伝えていくために、同じ言葉を繰り返している。

「まちづくりに取り組みます」の主体を「私たち」だけにするのか、「これから産まれてくるこどもたち」も含めるのかが決まれば、文章は整理される。

委 員 これから産まれてくるこどもたちを包含したほうが、取組姿勢としては良いのではないか。

委 員 基本構想は10年の計画であり、これから産まれてくるこどもたちも計画の後半には小学生となるので、十分市民としての力があると思う。未来に向けた10年の計画という意味合いも含めて、これから産まれてくるこどもたちも主体としたほうが良い。

また、「暮らしやすさを感じられる」ではなく、一つ上の段落にある「このまちを将来にわたり暮らし続けたいまちとするためには」に合わせて、「暮らし続けたいまちづくりに取り組みます」としてはどうか。

事務局 これまでの意見をまとめると「今を生きる私たち、そしてこれから産まれてくるこどもたちが、幸せを実感しながら誰もが暮らし続けたいまちづくりに手を携えて取り組みます」となる。

委 員 「一人ひとりが手を携えて」とすると、みんなで協力してという意味になるのではないか。

委 員 「一人ひとり」という言葉は、次の章以降にも出てくる言葉なのでつながりがあって良い。

委 員 序章の2段落目「一関市は、」から「まちづくりを進めてきました。」まで、文章が読点でつながっているので読みにくい。句点で区切ったほうがよい。

事務局 修正する。

委 員 序章の3段落目1行目に「東日本大震災や新型コロナウイルス感染症が私たちに大きな価値観の変革を」とあるが、この2つだけではないので「など」を追加したほうが良い。

また、2行目の「社会全体に構造的な変革を強く迫っています。」を「社会全体の構造的な変革と再編が進んでいます」としてはどうか。既に進んでいると

いう現在進行形とするとともに、進んでいるのは変革だけではなく再編もだと思うので追加することを提案する。

事務局 私たちの生活に大きな価値観の変革をもたらしたものとして、東日本大震災と新型コロナウイルス感染症を挙げたものである。社会全体に対して価値観の変革をもたらしたものはそのほかにも様々あるが、ここでいう「私たち」は一関市民のことであり、一関市民に特に大きな価値観の変革をもたらしたものとしてこの2つを記載している。

委員 「私たち」は一関市民のことをいうとのことだが、以降の段落には一関市という言葉が出てこない。

事務局 一関市総合計画は一関市の計画だということが根底にあり、「一関市」という言葉を出すところと出さないところを、文章の分かりやすさの観点から使い分けている。

会長 東日本大震災と新型コロナウイルス感染症だけを挙げることには違和感があるため「など」を追記してよろしいか。

(はいの声)

会長 「再編」と「変革」は意味が被ってしまわないか。

事務局 同じような意味合いになってしまうと思う。

委員 「変革」は新しく変わるというイメージであり、「再編」は今あるものを手直しするイメージであった。

委員 「価値観の変革」を価値観の「変化」としてはどうか。

委員 ここを変更とすると、その後の文章にも影響が出てしまうのでこのままでも良いと思う。

会長 変更しないこととしてよろしいか。

(はいの声)

委員 序章の3段落目の入り方として、「しかし」や「一方で」という言葉を入れたほうが前の段落からのつながりが良いと思う。

事務局 修正する。

委員 先ほど話が途中で終わってしまったが、「社会全体に構造的な変革を強く迫っています」を「社会全体の構造的な変革が進んでいます」としたほうが良いと思う。大変な状況の中でも頑張っていこうという趣旨の文章としたい。学校の統廃合など、現在進行形で変革は進んでいる。

事務局 既に進んでいるということを伝えるのであれば「変革を迫っている」ではない表現になるので変更する必要がある。

事務局 大変な状況の中でも頑張っていこうという内容は、次の段落で表しており、この段落はその前置きという構成であったので、全体構成の見直しも必要となってくる。

委員 「変革が求められています」ではどうか。

委員 ここだけ変更すると、後の文章がつながらなくなってくるので、変更しない方が良い。

委員 「今後大きく変化していくことが予想されます」とすれば、既に変化は進んでおり、これからも変化が続いていくことを伝えることができる。

会長 いただいたご意見は答申として市長に思いを伝える。

会長 審議はこれで終了とし、市長へ答申を行う。市では答申を受け、これを基に議案をまとめることとなり、議案とする中で修正することはあり得るが、この場での思いは伝える。

(2) 総合計画前期基本計画体系案について

事務局から資料No.2-1、2-2に基づき説明を行った。意見は、時間の都合から後日書面で照会することとなった。

10 答申

小岩会長から市長へ、一関市総合計画基本構想について答申を行った。

11 市長挨拶

今年の4月に諮問を行い、そこから8か月の間、ほぼ月に1回のペースで審議会を開催し議論を重ねていただいた。

大変な作業だったと思うが、本日が一つの区切りである。大変お疲れ様でした。

計画は策定するプロセスが非常に大切である。

事務局から進行状況の報告を受けていたが、今回の諮問はいわゆる白紙諮問であり、どのように策定していくかという議論から始まり、アンケート調査やワークショップ、パブリックコメントなども実施していただいた。

様々な方法で市民や市に関係する方々の意見を集約され、この答申の中には、委員の皆様のお思いと、様々な手法で意見を寄せてくださった方たちの考えの両方がまとまっているものと思う。

このような手続き、ステップを踏まえて、出来上がったもののため、一定の位置づけがされる。公定力ともいうが、今回答申いただいたものはそういった重みがあるものだと捉えている。

もう1点は、中身の話であり、合併をして新一関市となってから、この計画は3つ目の計画となる。

合併前の旧一関市でも総合計画を2つ策定しており、最初は総合発展計画という名称、その次に総合計画と名前を変えて策定したが、その時の担当者は私である。

旧一関市で総合発展計画、総合計画を策定した時には、旧一関市だけを見れば人口は減っておらず、横ばいの状況であった。

合併後から、市全体で見た時の人口が減り始めたが、合併してすぐの10年間は合併による高揚感のようなものがあり、人口減少は進行していたが様々なオブラートに包まれ、ハード整備も進んでいくような状況であった。

合併後の2順目、現行の総合計画の策定時は、人口減少が数字で表れていたが、実感はあまりなかった。

本日、合併後3つ目の総合計画の基本構想の答申をいただいたが、現在は人口減少の影響が具体化しており、皆さんも実感している状況にある。

人口が右肩上がりの状況では計画を作りやすいが、人口減少下での次期計画の策定は本当に大変な作業となる。これから先の10年間、さらにその先も見通さなければならず、人口が確実に減っていく状況の中で、失ってはいけないもの、高めていかななくてはならないものを考える必要がある。ハード的な事業ではなく、本質としてのまちの在り様や、市民の皆さんの幸福の共通項を探る必要があるので、かなり深い議論がないと出来上がらないと思っている。このような検討により、本日の答申に至ったと理解しているので、本当に大変だったと思っている。

本日、答申をいただいたので、今度は私が提案者として、来年2月の通常会議に提案を行い、議会という場で議論していただく。議決機関である市議会での決定となれば、基本構想は確定となり、今度は着実に進めていくというステップに入る。

基本構想とはまた別次元の議論となり、言葉だけの世界ではなく、本質的に具体化させていくこととなるので、委員の皆様には引き続きお力添えをいただきたい。

12 小岩会長挨拶

皆さん大変お疲れ様でした。

一つの区切りを迎えたわけだが、4月の諮問以降、全7回の審議会に加えて、アンケート部会やワークショップ部会、オンラインでの意見提出などもあり、皆様には本当に多くの時間を費やしていただいた。感謝申し上げます。

市長からも話があったように今後は議会で基本構想を審議していただくことになるが、我々の思いを事務局を通じて市長に伝えながら進めてほしいと思っている。

答申の内容には、キーワードを挑戦とし、「変わらないように変わり続ける」という思いが含まれている。

「ひとりひとりが輝く 挑戦しつづけるまち いちのせき」を将来像として掲げたの

で、この将来像の実現に向けて、我々も一緒にまちづくりを進めていきたいと考えている。

今後は基本計画の議論に移っていくので、引き続きよろしくお願いします。

13 担 当 課 市長公室政策企画課